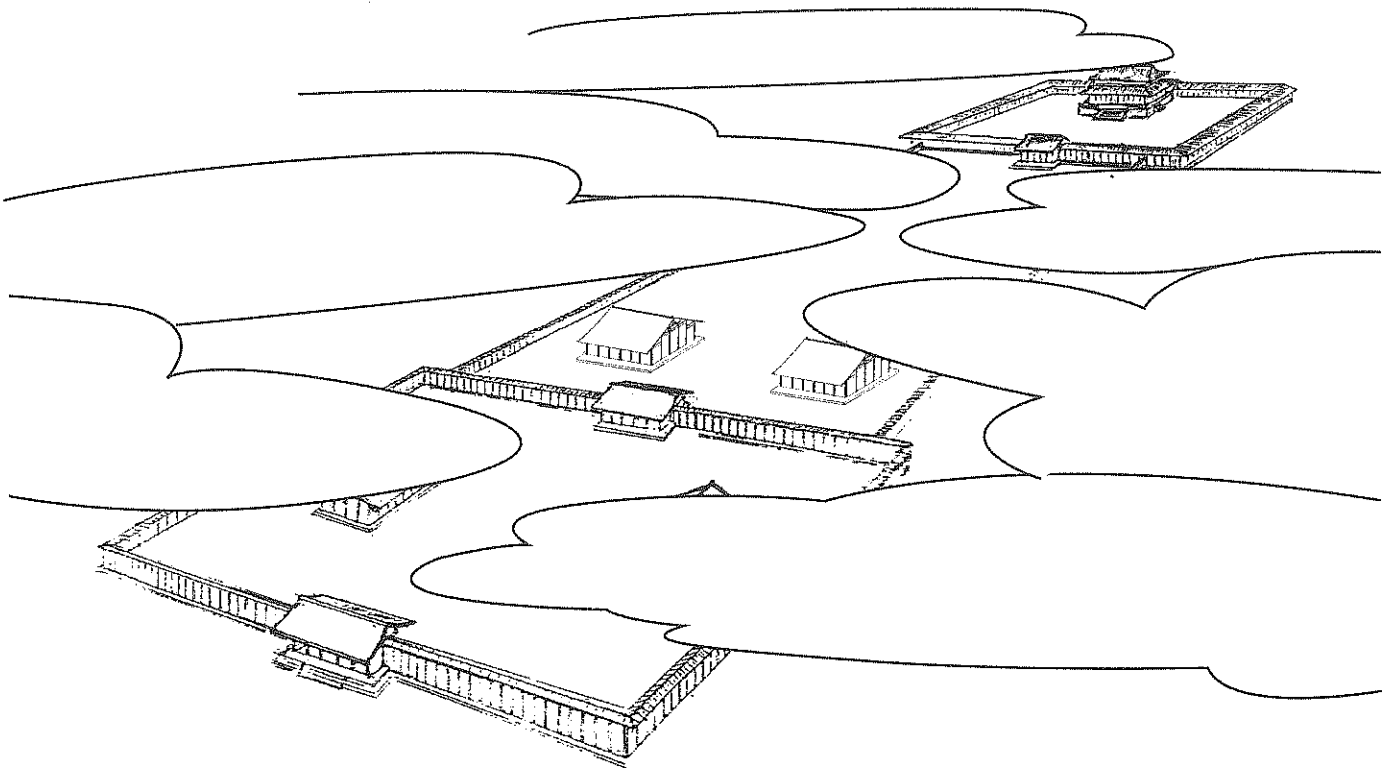
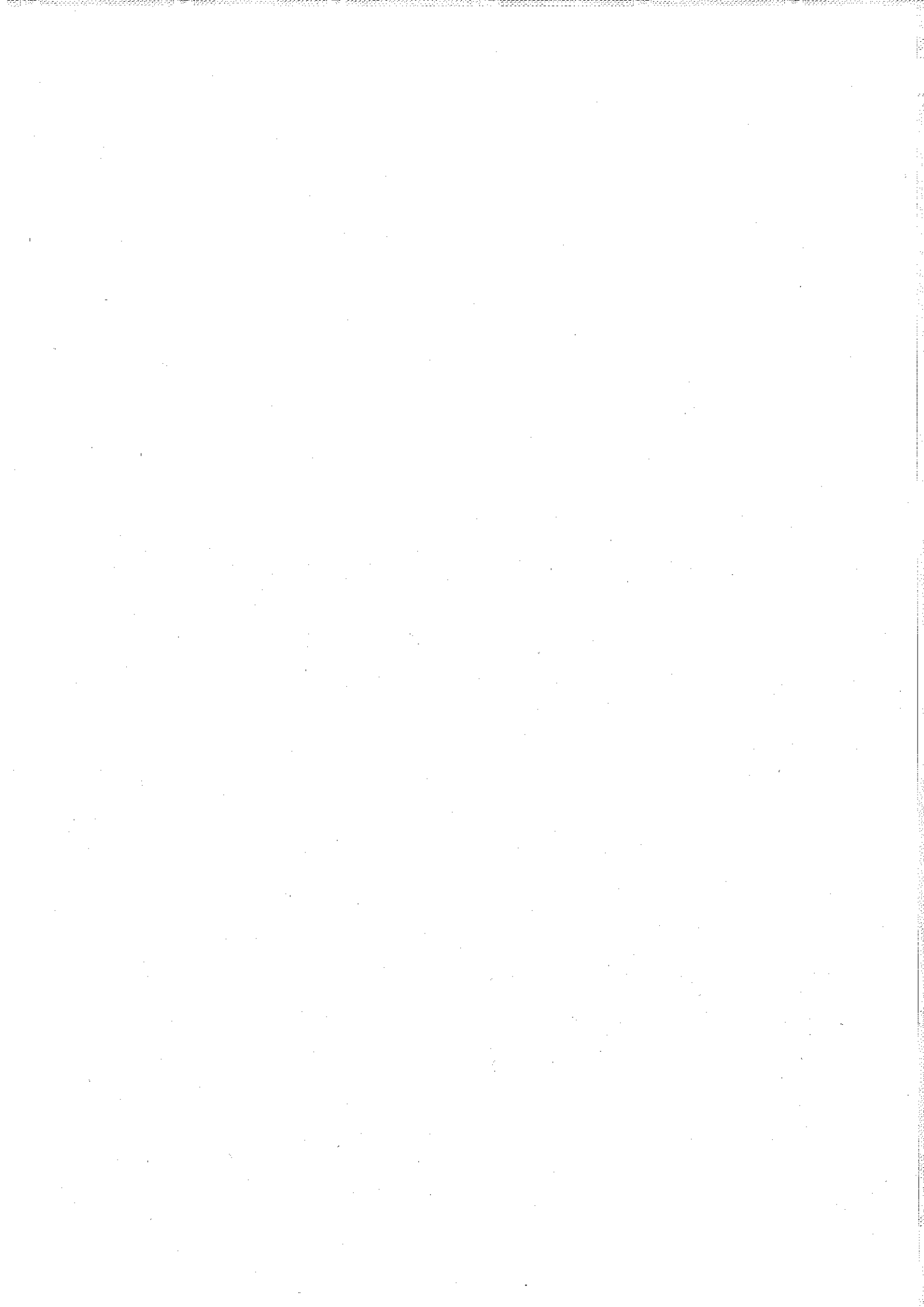


平成25年度
恭仁宮跡発掘調査
現地説明会資料



京都府教育委員会
平成25年12月1日(日)



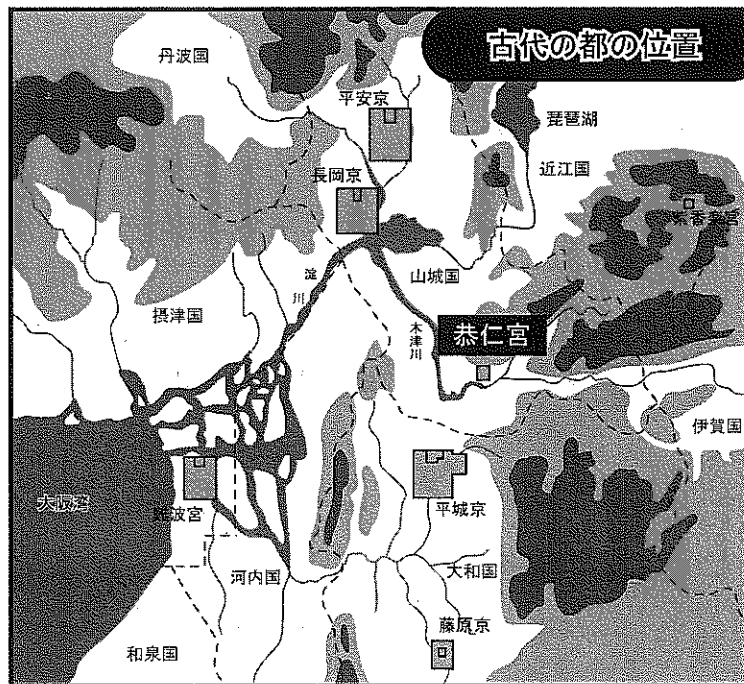
はじめに

京都府内には、古代に平安京、長岡京、恭仁京という3つの都が造られました。京都市の中心部に造られた平安京は、延暦13(794)年から明治元(1868)年までその役割を果たした、いわゆる「千年の都」です。また、平安京に都が遷される直前の延暦3(784)年からの10年間は、現在の向日市・長岡京市・京都市・大山崎町にかけて造られた長岡京で政務が行われました。

そして、この3つの中では最も古く、今からおよそ1270年前の天平12(740)年に、聖武天皇により、現在の木津川市加茂町、山城町、木津町にわたって造られたのが「恭仁京」、その中心となるのが、加茂町瓶原の地に造られた「恭仁宮」です。

宮の中には、主に天皇が暮らし、さまざまな儀式などが行われた内裏、政治や国家の儀式などが行われた大極殿や朝堂院、さらには官人達が仕事を行った役所(官衙)など、国の中でも最も重要な施設が造られました。恭仁宮を中心とする木津川市の一帯は、短期間ながら国の首都となっていたのです。

しかし、そのわずか4年後の天平16(744)年には、都は大坂の難波宮へと遷され、さらには平城京へと戻されることとなりました。恭仁宮は、短い役目を終えた後、天平18(746)年に山城(山背)国分寺へと造り替えられました。



これまでの調査成果

昭和48年度以降、京都府教育委員会や加茂町（現木津川市）教育委員会が実施している発掘調査によって、宮の範囲、大極殿や内裏などの宮内の主要な施設が見つかり、恭仁宮の実態が少しずつ分かってきました（第1図）。

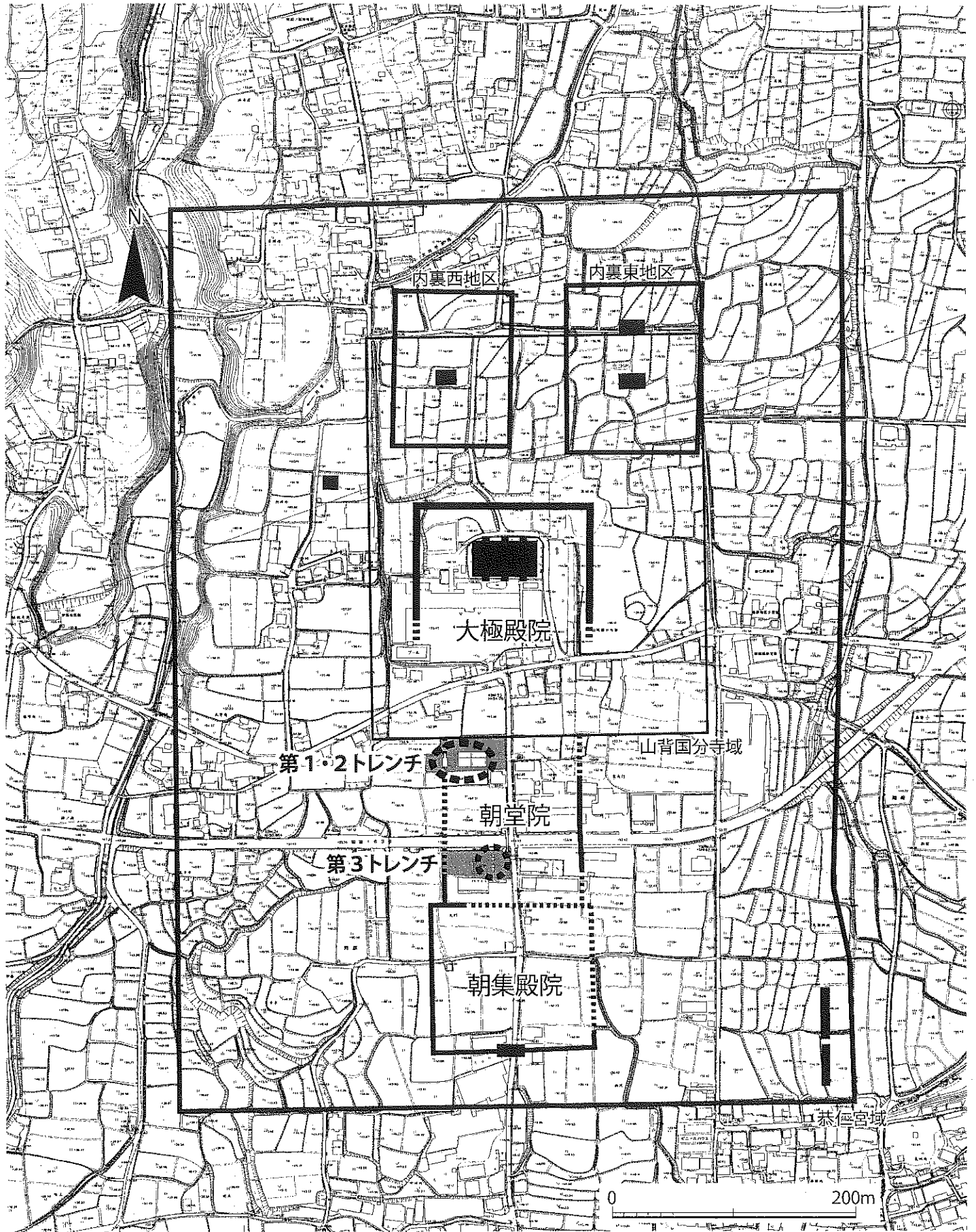
恭仁宮は東西に約560m、南北に約750mの大きさで設計され、その周囲は背の高い土塀（築地塀）で囲まれていました。

大極殿は、宮の中心から少し北側に造られており、高さ1m以上の大きな土壇の上に築かれた東西が45m、南北が20mもある大きな建物でした。朱塗りの太い柱を大きな石材（礎石）の上に建てた礎石建物で、北西と南西の隅に置かれた礎石は、当時のまま動かされていないことが調査によって分かりました。

大極殿院を取り囲む回廊は、北西隅付近を確認しています。回廊は築地を中央に築き、その両側を通路にした「複廊」と呼ばれる立派な形式のものです。奈良時代に関する公の歴史書である『続日本紀』には、平城京から恭仁京へ都が遷された際、平城宮の大極殿とともに、その周囲に設けられていた「歩廊」を恭仁宮へ移築したことが記載されています。発掘調査の結果、恭仁宮の大極殿や築地回廊が、平城宮と同じ規模で造られていることが確認され、『続日本紀』の記述が裏付けられました。

大極殿院の北側には、内裏に相当する施設が東西に2つ並んで設けられていたことを確認しています。現在のところ、この2つの区画をそれぞれ「内裏西地区」、「内裏東地区」と呼んでいますが、このような施設の配置は、恭仁宮だけの独自のもので、どちらが天皇の住まいされた内裏なのかは、はっきりしていません。「内裏西地区」は、周りが全て板塀（掘立柱塀）で囲まれた、東西約98m、南北約128mの大きさです。「内裏東地区」は北側が板塀（掘立柱塀）で、残る南側、東側、西側は土塀（築地塀）で囲まれた、東西約109m、南北約139mの大きさで、「内裏西地区」より一回りほど大きく造られていることがわかっています。

朝堂院・朝集殿院では、これまでその周囲を区画する板塀（掘立柱塀）の一部が確認されています。朝集殿院は、東西約134m、南北約125mの規模で、南側の朝集殿院南門が見つかっています。朝堂院は、朝集殿院よりも東西幅がやや狭くなることがわかっています。このことから、恭仁宮が平城宮を手本として造られた可能性があることもわかってきています。



第1図 恭仁宮跡全体図及び平成25年度調査対象地位置図(1/4,000)

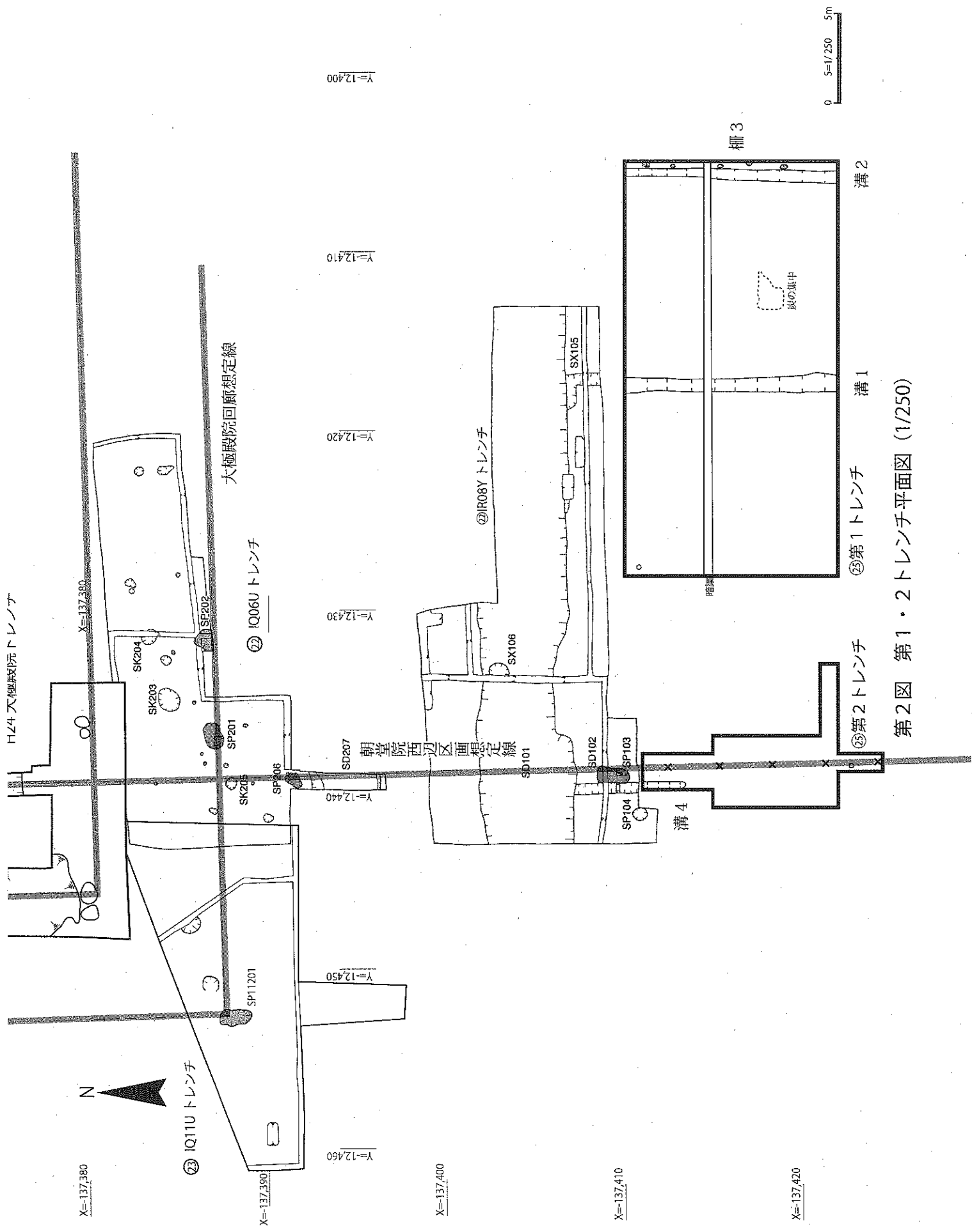
平成 25 年度調査でわかったこと

(1) 朝堂院内北西側の建物調査 (第 2 図)

朝堂院内では、平成 21 年度までの調査によって、南辺と東西辺区画の位置が確定しています。平城宮跡の朝堂院では 12 棟の建物が、難波宮跡では 8 棟の建物が整然と配置されていることがわかっていますが、恭仁宮では平成 24 年度に初めて朝堂院の南西端に位置する建物が見つかりました。

今年度は、朝堂院にどのような建物が建てられているのか解明することを目的として第 1 トレンチを設定しました (第 2 図)。この場所の北側には、平成 22 年度の調査によって山城国分寺の南端を限る築地塀に伴う溝が検出されています。調査の結果、恭仁宮期の遺構は見つからず、山城国分寺に関連する遺構が見つかりました。調査区の中央と東側には南北方向の溝 1・2 が、調査区の東端には柵 3 が見つかりました。溝 1 は、出土遺物から鎌倉時代には埋まったことがわかりました。溝 2 は、検出した層からみて溝 1 よりも古いことは確かですが、出土遺物がないため正確な時期は不明です。柵 3 は、溝 2 の東側に近接しており、柱穴が 5 基見つかりました。埋土の状況からみて、国分寺の時期の遺構である可能性が高いと考えられます。また、溝 1・2 の間には、炭が集中する部分があり、この周辺からは国分寺の時期の埴塀や鉄滓などの鑄造関連遺物が出土しました。この炭集中部分を中心として、国分寺の造営や修理に関わる金属加工が行われていたと考えられます。第 1 トレンチからは、国分寺の瓦や土器を中心として、コンテナ 20 箱分の遺物が出土しました。

第 2 トレンチは、朝堂院の西辺を区画する掘立柱塀を確認することを目的として設定しました。掘立柱塀の柱穴は、これまでの調査から 10 尺 (約 3 m = 当時の物差しは 1 尺が約 30 cm) の間隔で設置されていることがわかっています。第 2 トレンチの北側に隣接する平成 22 年度の調査では、2 基の柱穴が見つかりましたが、いずれも柱穴の深さは浅いものでした。今回のトレンチでは 5 基の柱穴の存在が予想されましたが、調査の結果いずれの柱穴も見つけることはできず、恭仁宮が廃絶した後に大きく削られていることがわかりました。第 2 トレンチからは、国分寺の瓦や土器を中心として、コンテナ 5 箱分の遺物が出土しました。同様に、隣接する第 1 トレンチの場所も恭仁宮が廃絶した後に大きく削られている可能性が高まり、朝堂院建物、区画ともに今回の調査では明らかにできませんでした。



第2図 第1・2トレンチ平面図 (1/250)

(2) 朝堂院南西側の建物調査 (第3・4図)

朝堂院の南西側では、平成24年度の調査で柱穴が23基見つかりました。これらの柱穴の配置から、東西8間、南北6間の掘立柱建物になる可能性が指摘されていました。今年度は、平成24年度の調査で見つかった柱穴が本当に1つの建物になるのか、また建物を構成する柱がどのような配置になるのかを解明することを目的として、第3トレンチを設定しました。

調査の結果、新たに柱穴5基(柱穴24~28)が見つかりました。柱穴は、いずれも不整形な方形となっており、断面観察の結果、柱が抜き取られていることがわかりました。そのため、この建物は最終的に解体されたと考えられます。また、柱穴の抜き取り痕跡から瓦が出土していることから、少なくとも一部には瓦が用いられた建物であった可能性が考えられます。柱穴24~27の大きさは、1辺約1m、深さ約1mの大きさです。一方で柱穴28は、1辺約0.5m、深さ約0.5mと他の柱穴の半分の大きさです。柱穴27・28の間隔は8尺(約2.4m)、他の柱穴の間隔10尺(約3m)に比べてやや狭くなっています。さらに、柱穴28の西側には、幅20cmの東西方向の溝3が見つかりました。

平成24年度の調査区では、西端の柱列に近接して南北方向の溝2が見つかりました。今回検出した溝3とあわせて考えると、外周の柱列が基壇(建物の建つ土台)となり、内側に南北5間×東西6間の建物と考えるのが最も整合性のある案と考えられます。また、基壇の外装を構成する柱穴や溝からは、石材などの部材が見つからないことから、この基壇の外装は木製である可能性があると考えられます。

木製の外装基壇は、近江国庁や遠江国分寺、三河国分寺、飛鳥稻淵宮とされる稲淵川西遺跡で確認されています。いずれも金堂などの主要な建物に用いられている点が特徴的です。

今回は調査範囲が狭く、今後基壇や建物構造の詳細を知るための調査を実施することが必要です。

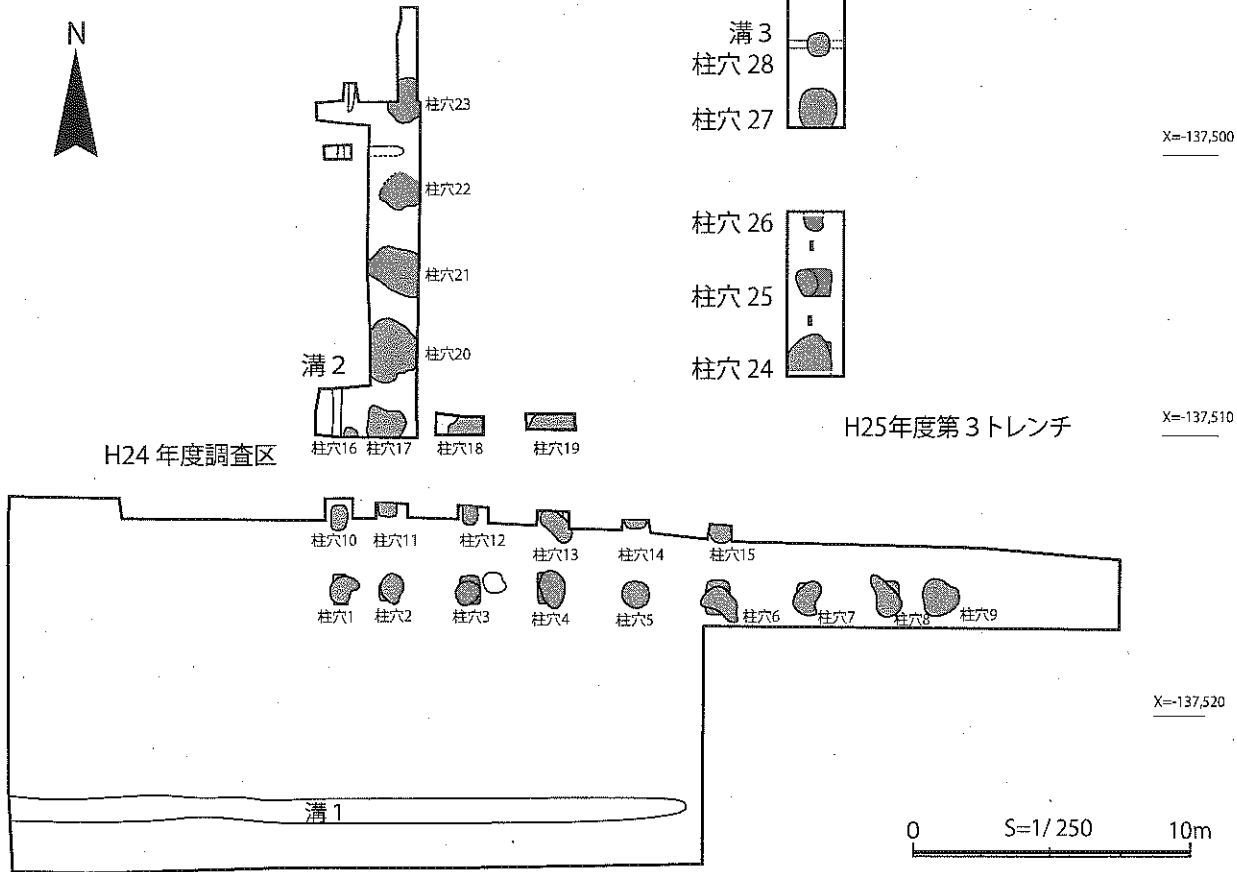
Y=12,430

Y=12,420

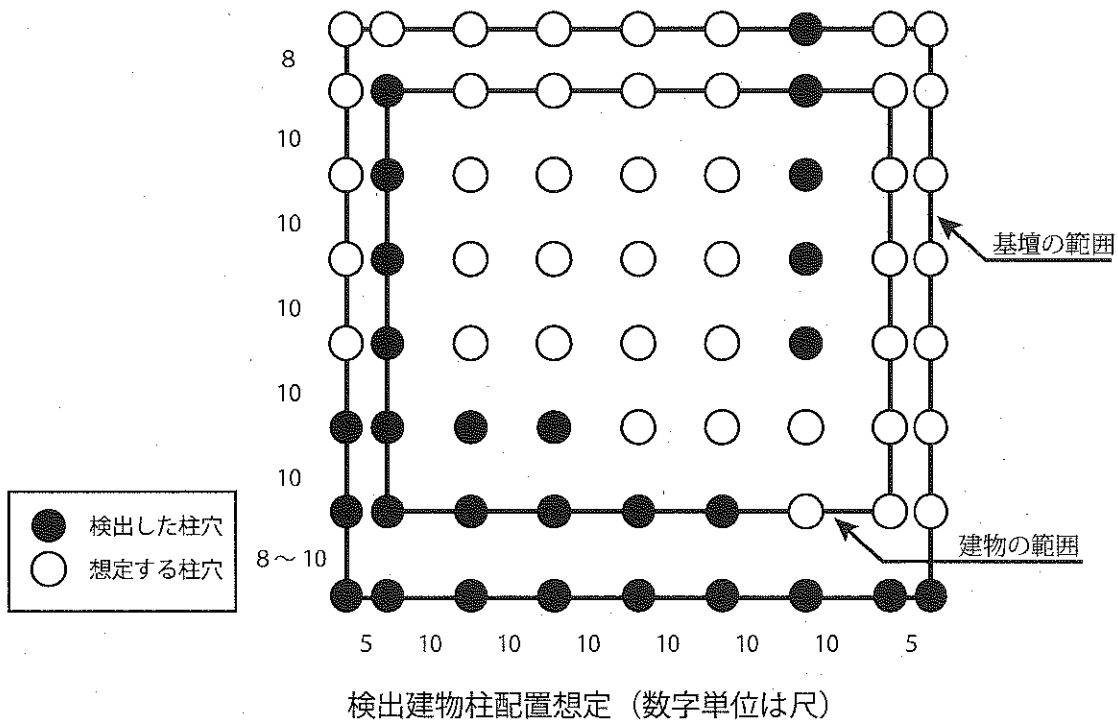
Y=12,410

Y=12,400

Y=12,390

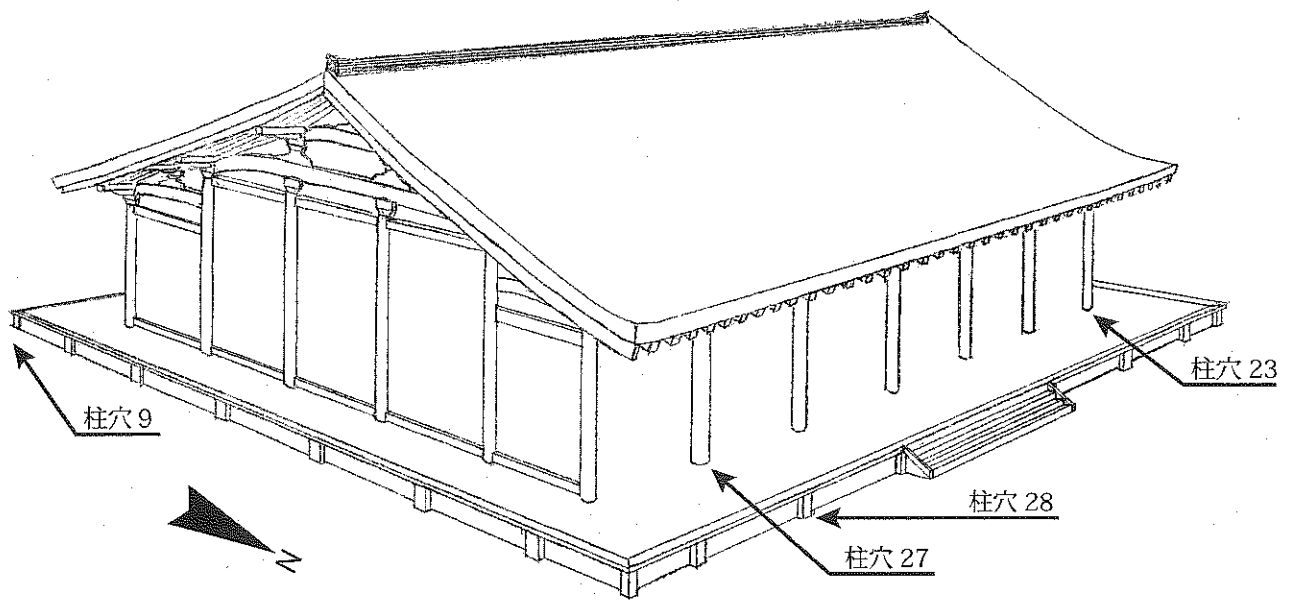


平成 24・25 年度調査区検出遺構

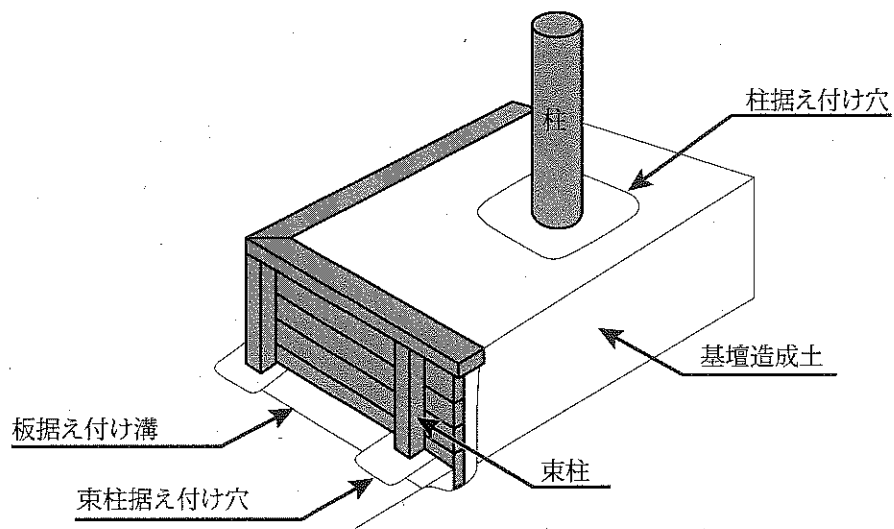


検出建物柱配置想定 (数字単位は尺)

第3図 第3トレンチ平面図と建物柱配置想定 (1/250)



朝堂建物のイメージ図（北東から）



木製基壇外装

第4図 朝堂建物と木製基壇のイメージ図

まとめ

朝堂院の南西側では、平成 24 年度に恭仁宮の朝堂院で初めて見つかった朝堂建物の柱穴が想定位置から見つかり、朝堂建物が 1 棟の建物であることがわかりました。さらに新たに見つかった柱穴と溝から、木製の基壇をもつ可能性が高まりました。見つかった朝堂建物の規模は大きく、柱穴の規模からみても本格的な建物であったと考えられます。これまで十分にわかっていなかった朝堂院の内部構造を解明する上でも、また、この大規模な遺跡の保存と活用を考える上でも、大きな意義のある発見となりました。

一方で、朝堂院の北西側では、恭仁宮の遺構を確認することはできず、恭仁宮が廃止された以降に大きく削られていることがわかりました。見つかった遺物からは、国分寺の造営や修理に関わる金属加工が行われていたことがわかりました。恭仁宮期の地面が削られたのは国分寺の創建期と考えられますが、大規模な地形改変の意味も含めて今後の課題となりました。

今後の調査をさらに進めることにより、恭仁宮の朝堂院の構造が明らかになれば、他の宮との設計の違いや、朝堂院の性格や機能は何かなど、多くの議論を具体的に検討することが可能となります。また、それだけでなく、平城宮など他の宮都の重要な課題をも解明する鍵となる可能性があります。

最後になりましたが、今回の調査に際し、調査に参加していただいた皆さん、各方面から御指導、御協力いただいた方々に、深く感謝いたします。
